

の偉大なる文明の賜である、今日の如く各自の利益や、権利やを主張したならば到底社會の安定を保つことは出来ぬ。「俺は貴様の事など考へて居りはせぬ、貴様の隙を見てどての腹を抉つて引奪るぞ」「俺もさうだ」といふことになつたならば、どつちも枕を高ふして寝ることも出来ない、「貴様先きに寝ろ」「馬鹿な事を言へ、貴様から寝ろ」「貴様が寝たら時計でも墓口でも引奪つてしまふぞ」といふことであつたならば、逆も人間の平和な社會を成すことは出来はせぬ。平和な社會を構成するには、相寄り相扶けて行かなければならぬ。そこで社會主義者は相互扶助といふことを盛んに言ふが、彼等は扶助を言ひつゝも實際は階級戦争を煽つて居るものである、彼等は辯解である、互ひに相扶くるの主義ならば人間の精神を不平に導いてはならぬ、不平を懐かしたならば仲の好かりし者も反目する、人間の心が荒らぐのである。人間の心を平和に導かずして、これを荒らげて不平に導き、險惡に導き、さうして闘ひを挑ますといふに於て、如何して相互扶助を實現するか。嫁と姑とは仲好くせよと言つて置き

ながら、先へ廻つて嫁の所へ行つて姑の悪口を言ふ、「あんな根性の悪い婆はありはせぬ、あんなそんなにへい／＼して居る事はない、たまには頭の二つ位毟つてやんなさい」といふやうな事を言ふ、今度は又姑の所へ行つて、「あんな悪い嫁はない、今にあんな酷い目に遇ひますぞ、寝て居る時に棒で頭をどついてやんなさい」と言つて煽つて廻つて、さうして「俺は彼の家庭の平和を希望して居る」と言つたならば、随分滑稽ぢやないか、「彼等は理想は善いけれども實現の方法が悪い」などと辯議をする者もあるけれども、その理想といふのも實は策略手段である、相互扶助ナンといふ事は彼等の口實である、されば論より證據、彼等が權力を得た時の實状は如何、彼等が天下を取つた時何をやつて居るかといへば、先づ特權階級を打破するといつて富豪を屠り、宗教家を屠り、今までの人物を屠つて、社會に功績あつた者をも侮辱する、學問の上の功勳者をも認めんければ、軍事上の功勳者をも認めぬ、經濟上の功勳者をも認めぬ、そんな者は要らぬといつて叩き捲つてしまつて、さうして今までのらくらし